輝け！ けんせつ小町

土木設計

今井亮子

戸田建設株式会社
相鉄・東急直通線、綱島トンネル他
戸田・岩田地崎・りんかい日産・奈良
特定建設工事共同企業体

「けんせつ小町」は、
日建連が定めた建設業で
活躍する女性の愛称です。

my Beginning 私が建設業界に入った理由

仮囲いの中で見た高揚感をずっと。

相互直通線の整備が進む相鉄線と東急線。この整備事業の一環として新設される綱島トンネルの工事は、着工から約一年半が経ち、シールド掘削に向けた立坑の構築が佳境を迎えている。この工事に設計職として携わっているのが、今回登場してくれた今井亮子さんだ。

仮囲いのゲートが開く瞬間を待って

「小学生のころのことなので、親から聞いた話なんですけど。ある日、私が学校からなかなか帰ってこなかったことがあったそうです」

現在の仕事に就いたきっかけを聞くと、今井は少し照れくさそうに幼少期の話をしてくれた。

「時間を忘れて建設工事の現場を見ていたらしくて。当時、最寄り駅前のロータリーで大規模な工事をしていたんですね」

あの囲いはなんだろう。疑問に思いながら毎日見ていると、時折人や車両の出入りのために仮囲いのゲートが開いて、中がちらりと見えた。

「『大きい機械がたくさんある！』っていうカッコ良さに惹かれたんでしょうね。見えるたびに少しずつ建物ができあがっていく様子を見ることも、好きだったんだと思います」

工事現場ってかっこいい。幼い今井の中に根を張った感動は、彼女を迷わず建設業の道に進ませた。工業高校へ進み、大学では土木工学を専攻。就職活動は現場監督一択だった。

今年で入社からちょうど一〇年になる今井。これまでの経験に関しては、「携わった現場の数がすごく多いんですよ」と語る。

出向も合わせると、これまでの配属先は八件にもなる。「ほとんど一年ごとに働く場所が変わりました。改めて振り返るといろんなことを思い出します。初めて配属された現場では『一輪車のことはネコって呼ぶんだよ』なんて基礎知識から丁寧に教えてもらったこととか。現場事務所を設置するために、更地の草むしりを一生懸命やったことも、心に残っています」。

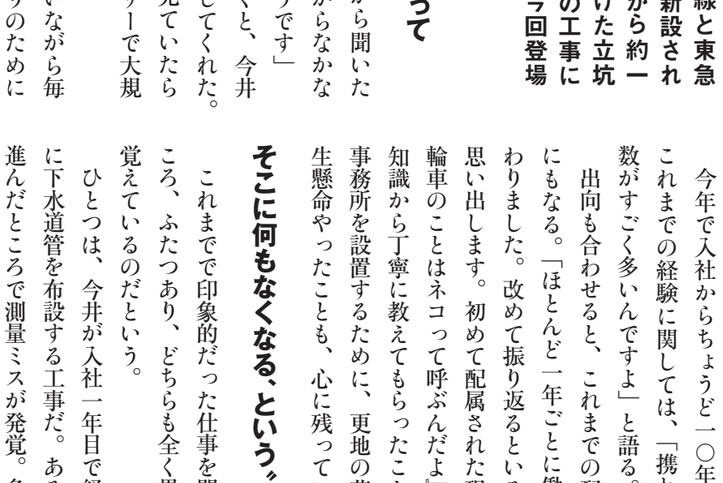
そこに何もなくなる、という〝完成〟

これまでで印象的だった仕事を聞いてみたところ、ふたつあり、どちらも全く異なる理由で覚えているのだという。

ひとつは、今井が入社一年目で経験した地中に下水道管を布設する工事だ。ある程度施工が進んだところで測量ミスが発覚。多くの工程をやり直すことになってしまい、現場は混乱した。遅れを取り返そうと慌ただしくなる現場にいて、今井は「工事って人の手で動くものなんだな」と改めて実感した。

「職人さんたちの作業を見ていると、細かい部分はやっぱり手作業なんですよね。『土木は人の手で形にするものだ』と再確認しました」

施工に関わり始めたものの、異動が決まり、今井はこの現場を途中で去った。しかし竣工後、

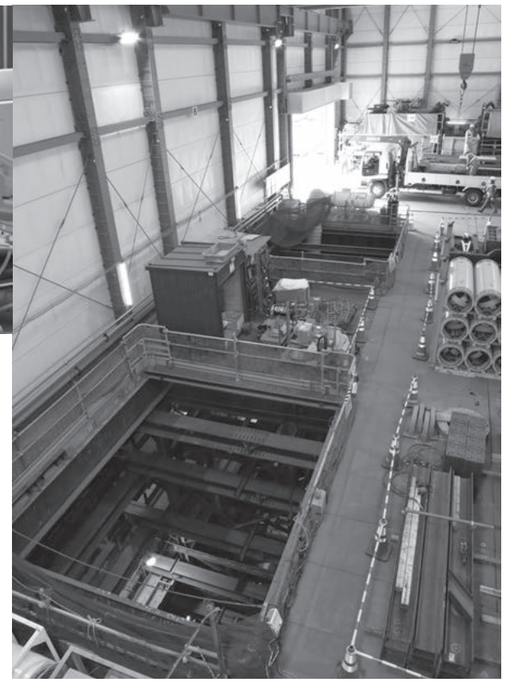


現場で進捗確認をすることが楽しみだと笑顔で今井は話してくれた。

profile

いまい・りょうこ●1984（昭和59）年、千葉県生まれ。幼いころから工事現場で働くことへの気持ちが強く、大学は土木工学科を卒業。2008年、戸田建設（株）に入社。宅地造成や、橋梁架設、耐震補強工事など様々な現場を経験した後、出向、産休・育休を経て技術部へ異動。現在は設計担当として、綱島トンネル工事に従事している。

文：山縣 杏　写真：中原一隆



上／技術部で行っていた構造計算の延長である現在の設計業務。
右／現在担当している現場。防音建屋内には、地下30mまで続く立坑がある。

施工管理職の職員と一緒に行う工程確認。工事の全体を把握する重要な打ち合わせだ。

現地を見てみたくて、今井はひとりそこへ赴いた。すると、それまで味わったことのなかった感動が押し寄せてきたそうだ。

「工事をしていたときは、多くの職人さんや職員が慌ただしく動きまわり、重機もひっきりなしに稼働していて大変でした。でもそれが跡形もなく撤収され、何事もなかったかのように静かだったんです」

今井の胸に迫ってきたのは〝何もなくなっている〟という感動だった。現場で見ていたあらゆるものがなくなり、そこにはピタリと閉じたマンホールがたったひとつあるのみ。しかしその地下には施工に携わったインフラが確実に存在する。その様に、今井は「完成」を感じた。

「『ああ、すごい。本当に終わったんだ』って。心底感動しました」

残業してがんばるより、残業しないために力を尽くす

もうひとつ今井が学びを得たのは、IT関連団体への出向だった。それまでとは全く異なる業務に最初は戸惑いもあったようだ。

「入社三年目だったので、仕事も覚えてちょうど現場が面白くなってきた時期でした。でも、現場じゃないところへの出向。最初は『モチベーションが上がらないなぁ』というのが正直な気持ちでしたね」

しかし、いざ働いてみると、そこには今井にとっての大発見があった。それが、ワークライフバランスを踏まえた働き方だったのだ。

現場での仕事は、工程が遅延すれば残業もやむを得ない。遅い時間まで働くことは致し方のないことだった。しかし、出向先の働き方に対する意識はまったく違っていた。

「みんな定時になったらピタリと帰れるように仕事をしている。決まった時間までに仕事を終わらせるにはどうするかを考え、徹底して効率化が図られていました。それが大きな衝撃でしたね。残業してがんばるのもいいけれど、きちんと時間通りに終えることの大切さに気付きました」

実際、出向を終えた後に今井は出産を経験し、産休・育休を取得。子育てをしながら働く日々の中で、きちんとスケジュールを管理して働くクセはここで養われたのかもしれない。

ゼネラリストという武器を活かす

現場、出向、産休・育休、設計。多くの経験を経て、現場監督へ

現在の今井は、時短勤務をしながら設計職に就いている。担当する綱島トンネル工事では、構造計算などデスクワークが中心だが、工事の進捗を自分の目で確かめるため、実際に現場に足を運ぶことも少なくない。

「たくさんの現場を経験した中で、どの経験が特別、直接的に役立つということはない」としながら、今井はこうも続ける。「でもどの現場

「いまは子育てをしながらの時短勤務ですが、将来的には現場監督として、現場を取り仕切っていく存在になって欲しいですね。
そうして、他の若手社員にとっての目標となってくれればと思います」（小山統括所長・左）

でもそれぞれに学びがあって、多くの経験ができたからこそ、広い視野で工事を捉えることができているんじゃないかな」。

彼女が次に目指すのは、もちろん現場監督のポジション。これまでの経験を活かし、再び現場に立ちたいと意気込んでいる。

「学生の方が現場見学に来たら私が案内するのですが、学生さんから質問があまり出なくて。何故だろうと考えたら、私が現場について喋りすぎかなって最近気付いたんです（笑）」

工事のことになると話が止まらないほど、現場が好きだという今井。本格的に復帰する日もきっとそう遠くないだろう。そして現場所長として活躍する姿を、今井自身も、周りの人間も、待ち望んでいる。

my style

仕事ではパソコン、プライベートではスマホと液晶ばかり見て過ごしていたので、そこから離れようと、音楽環境を整えました。無線のヘッドホンは混雑時の通勤電車内でもストレスなく使えるし、スピーカーは離れた場所からでも操作できて便利です。聴くのはもっぱら洋楽。英語は苦手だけど、歌詞の意味を確かめながら集中して聴くのも楽しいですね。

今井が愛用しているヘッドホンとスピーカー